

第2回 孤島の震災 - クレタ島のミノア文明とサントリーニ火山噴火

紺碧の空と葡萄酒色の海、空と海の境界が定かでないエーゲ海諸島では古来多くのドラマと伝説が生まれ、人々のロマンをかきたててきた。1900年にイギリス人考古学者のエヴァンズはミノタウロス伝説で有名なクノッソス遺跡を発掘し、迷路のように並んだ数多くの部屋からなる建物をクノッソス宮殿と名付けた。部分的にコンクリートで復元されたクノッソス宮殿には鮮やかなフレスコ画や食料を保存する土器などとともに、線文字A・Bといわれる不思議な粘土板文書が発掘された。1950年代になり線文字Bはイギリス人建築家のヴェントリスによって解読され、クレタとギリシア本土の親密な関係が立証されることになる。伝説では迷宮にひそむ怪物ミノタウロスを退治したのは、アテナイの英雄テセウスで、アリアドネの麻糸をたどって迷路から脱出したという。



エーゲ海の夕焼け（クルーズ船より1994年撮影）

ホメロスが「葡萄酒色の大海のまっただ中にクレタなる土地があり、美しく肥沃でもあり、四方を海に囲まれる」（「オデュッセイア」第19歌）と謳ったクレタ島。古代ギリシアで「葡萄酒色の海」とはエーゲ海のことを指した。そのエーゲ海の南端、ギリシア本土とトルコ西岸部とを結んだ逆三角形の頂点に孤島クレタが位置する。

クレタ島は前2000年頃にはすでに文明の最先端を走っていた。クノッソスのような都市が咲きほこり、宮殿が次々に誕生する。オリエント文明先進地のシリア・パレスチナやエジプトからヨーロッパ本土や西方へ向かう海上交易の中継地点でもあった。

クレタ島の都市には城壁というものが存在しなかったらしい。クノッソス宮殿のそばには数万人の住民が暮らし、多くは職人、商人や船乗りが平和に生業と交易を営んでいたという。交易経済が必要とするのは平和と他者との協同だ。その結果としてのミノア文明、物質的な豊かさを作ったのはオリエント地域を吹き渡るコスモポリタニズムの息吹だった。目の覚めるようなブルーの顔料を用いたクレタ美術、のびやかなクレタ様式がエーゲ海を席卷するほどの文化帝国でもあった。

しかしそのミノア文明は前15世紀中頃に弱体化した。そのきっかけは島の北方120kmにあるテラ島・サントリーニ火山の爆発と大地震だ。テラ島がこの火山噴火で吹き飛んでしまい、クレタ島は巨大な波の直撃を受け、地震に揺さぶられ、火山灰と有毒ガスに包まれた。北風に乗って、悪臭を放つ煙がシリアとナイルデルタにまで到達するような大災害だった。その後エーゲ海の主役をミケーネに譲ることになる。それでも約200年後に起こったとされるトロイア戦争では、クレタ軍はミケーネのアガメムノンを総帥とするギリシア軍のなかで主力となるほどの大船団を出している（ホメロス「イリアス」第2歌）。

クレタを治めるミノス王はエジプトのファラオのような存在でなく、島全体に政治的支配を及ぼした形跡はない。宮殿は同時に神殿であり、島の経済生活の大部分が集約された巨大な倉庫だったのかもしれない。

クレタは孤島とはいえ、決して専制国家のタコツボ社会ではなかったのだ。だからこそ未曾有の災害に遭って統治者が代わっても、地中海東部における海上交易の中心たるべく復興を果たし、大船団を派遣するほどの存在感を示したのではないだろうか。



クノッソス宮殿跡（1994年スケッチ）

その後のクレタ島はどうなったのか。政治的な全盛期をすでに先史時代に属する青銅器時代に終えていたが、外部から侵入した征服者はギリシア本土、なかでもペロポネソス半島から渡来したドーリア人だった。暗黒時代とアルカイック期（それぞれ前十一世紀から前九世紀にかけてと前七世紀から前六世紀にかけて）のクレタが文化の空白期に陥っていたわけではなく、この島にはまれに見るほど多くのポリスが誕生したと伝えられている。歴史時代初期のクレタはギリシア世界にあって、立法家と法律の産地だったという伝承もあり、先史時代以来の開放的な社会が民主政のポリスによって引き継がれたととらえるべきだろう。

（参考図書）

- ツェーラム「神・墓・学者」（中央公論社）1962年
- ヴァンダーリヒ「迷宮に死者は住む」（新潮社）1975年
- ホメロス（松平千秋訳）「イリアス（上下）」（岩波文庫）1992年
- ホメロス（松平千秋訳）「オデュッセイア（上下）」（岩波文庫）1994年
- Everyman Guides「CRETE」（Gallimard）1995年
- プルタルコス「英雄伝1-テセウス」（京都大学出版会）2007年
- ブローデル「地中海の記憶」（藤原書店）2008年